

## 実績報告書(抜粋)

教育プログラム名称 グループワークによる知識創造教育	研究科専攻名 知識科学研究科 知識社会システム学・知識システム基礎学専攻
-------------------------------	--

## 本事業実績の概要

本プログラムの目的は、研究科の多様性を活かしながら、グループワークを通じて知識を創造できる研究者や高度職業人を養成することである。そのために、平成19年度は次のような行動計画を立てた。以下では、項目ごとに記述する。

- 1) 研究科が当初から実施してきたコースワークでの学生グループによる事例討議や調査研究などのグループワークをさらに推進し、異分野・異文化の人たちと協働する能力を学習させる。

**実績：**各教員によるグループワークの実施状況を調査し、グループワークを採用していない教員は、グループワークの評価の難しさやなどにより、その採用に躊躇していることがわかったので、研究科内FD活動を通じてグループワークの強みや評価の手法について教員の理解を深め、使ってもらえるようにする。

- 2) 既存の英語テクニカル・コミュニケーション教育に加えて、新たに日本語技術教育を提供し、知識の伝達・共有のためのコミュニケーション能力を習得させる。

**実績：**工学系学部における日本語教育の先進校を訪問調査した。それを参考に、「言語表現技術」という科目を新たに設計し、その講師も確保した。講義は今年度後半に二回実施する予定である。

- 3) 知の創造・共有・活用の理論・実践であるナレッジ・マネジメント(知識経営)の理論を学びながら、ナレッジ・マネジメントの技術・手法とグループKJ法やブレインストーミングなどの集団的知識創造手法を習得させ、知識創造を体験させる。

**実績：**ナレッジ・マネジメントについては、既存の講義で学ばせた。グループKJ法のワークショップを8回実施した。ブレインストーミングは、先のワークショップの一環として実施した。今後は、学生のレベルや目的に合わせて、初心者用ワークショップと応用ワークショップ、実際の研究データのためのワークショップの三つのタイプを実施する。

- 4) 学生向け公募提案型研究助成制度を通じて、学生チームに地域の組織(行政、企業、小学校など)との交渉、それらの組織の抱える問題を科学的に解決するアクションリサーチ・プロジェクトのデザイン/助成申請書執筆、リサーチの実行(文献研究・フィールドワーク)、研究報告書提出・プレゼンまでの一連の知識創造プロセスを体験させる。

**実績：**研究計画書を書かせて、10の学生グループ・プロジェクトを採択した。予算のかなりの部分を、文献研究のための書籍購入や大会参加のための旅費に使った。

- 5) 日本プロジェクトマネジメント協会との産学連携を通じて、協会が派遣する実務経験者によるプロジェクトマネジメント教育と、協会の会員企業のプロジェクト現場を体験するインターンシップを提供し、学生にプロジェクトを企画しマネージする基礎的能力を体得させる。

**実績：**プロジェクトマネジメント教育の講義を初級、中級、上級に分類し、その教育

内容について外部講師と設計した。今年度は、試行として、初級クラスを3度、上級クラスを1度実施した。インターンシップは現在、協会と交渉中。

#### 本事業に係る具体的な成果

以下、項目ごとに成果を記述する。

- 1) グループワークを一層推進し、学生に異分野・異文化の人たちと協働する能力を学習させる。

成果：学生は元々、学生専攻が他分野にわたり、留学生も多いので、グループワークによって、上記目的は達成したと判断する。

- 2) 新たに日本語技術教育を提供し、知識の伝達・共有のためのコミュニケーション能力を習得させる。

成果：講義が未実施なので、最終目的は達成していないが、準備は進んでいる。

- 3) グループKJ法やブレインストーミングなどの集団的知識創造手法を習得させ、知識創造を体験させる。

成果：グループKJ法の各ワークショップ終了後のアンケート調査によれば、いずれも参加学生の評価や満足度が高かった。また、ワークショップを数回経験した学生をTAとして採用し、演習を手伝うことにより、さらなる経験を積んだ。

- 4) 学生向け公募提案型研究助成を通じて、一連の知識創造プロセスを体験させる。

成果：以下の9つのプロジェクトを研究計画書の審査によって採択した。

- 我が国におけるサイエンスカフェ活動の最新動向の研究
- ケータイ・リテラシー運動参加者に関する意識調査
- ケータイ・リテラシー学習経験をもつ携帯電話新使用学生の利用実態調査
- バーチャルリアリティの先端技術を用いたインタラクティブな作品の制作
- 成功事例に学ぶ水族館の経営 知識経営の視点から
- 大学院生活満足度評価のための質問紙
- 作成チーム医療に必要な知識の関係性の可視化
- 石川県の伝統工芸の歴史・文化に関する基礎調査
- 高齢者の残存能力・潜在能力を有効活用する社会システムの構築
- サービスサイエンスの最新動向調査

この中には、初年度は時間がないので、公募以前から進行していたグループ・プロジェクトにも声をかけて研究計画書を書いてもらったものもある。したがって、申請の段階では主に文献研究による予備調査を進める計画であった。しかし、バーチャルリアリティの先端技術を用いたインタラクティブな作品を制作するプロジェクトのように、国内コンペで上位入賞し、国際大会にも参加が決まって、既に最終成果を挙げているプロジェクトもある。その他のプロジェクトも、最終報告書によれば、文献研究の段階を既にすませて、本格的な研究段階に進んでいるものがほとんどである。

- 5) プロジェクトマネジメント教育

成果：各レベルのシラバスを、日本プロジェクトマネジメント協会スタッフと共同で設計した。単位を与えない形で講義を試行したが、受講者の中から1名が日本プロジェクトマネジメント協会の初級の資格試験を受験し、合格した。